



The History and Data of Reader Surveys in Japan:

Before and During World War II

読書調査の歴史と資料

戦前・戦中

Atsuhiko Wada

和田敦彦

樹村房

はじめに

本書は、戦前、戦中の読書傾向調査のデータを、利用しやすいよう整理、集めたものである。読書傾向調査とは、購読している雑誌や、愛読書などを質問紙形式で問い、その結果をまとめたものである。明治期以降、官民で数多くなされ公開されていったが、それら調査自体を通史的にとらえた研究がいまだ存在しない。本書では、〈解説編〉で以下、この読書傾向調査がどのように生まれ、広がっていったのか、その役割とともに説明し、続く〈資料編〉で、これらの調査から主要な調査を選んで書誌情報や簡略な解説を付し、それらの調査結果を収録する形をとっている。

まず、これら読書傾向調査が、なぜ重要なのかを明確にしておきたい。読書傾向調査は、ある場所、時代においてどのような読者が、何を読んでいたのかを明らかにしてくれるものである。とはいえ、読者が何を読んでいたかを知るためには、読者を調べなくともその時代に刊行された出版物の内容や量を調べればよいと考えることもできよう。しかしながら、ある出版物が書かれ、刊行されたということと、それが読まれたということとは同じではない。その出版物は限られた人々の間でしか読まれなかったかもしれないし、各地域にまで広がりはしなかったかもしれない。発行や販売部数の多さはむしろその流通の広さをうかがう手がかりとはなるが、それでも読者の年齢層や地域によって大きな享受の違いがあり得るだろう。出版する側、書く側ではなく、読者の側の資料を掘り起こし、歴史をとらえ直していく意味はそこにある。

読者の歴史をうかがうための資料は、むしろ読書傾向調査に限らず、幅広く存在する。分かりやすく区分すればそれらはおおむね三つに分けられよう。第一に、出版物自体のもつ情報が、間接的に読者をとらえていく重要な手がかりとなることは言うまでもない。出版物の内容はむしろ、形や言語も、それを読んだ読者をうかがううえでの重要な手がかりとなる。出版物がどこにどれだけあるか、広がっていたかといった位置情報（蔵書としての情報）もそれに含めてよいだろう。第二に、書店や取次など、読者へと出版物を仲介する人々や組織の資料がある。そして第三に読者自身が作成した資料や、読者についての研究、調査資料がある。むしろこれらは重なる部分もあるが、こうして分けておくことで読者をとらえるための資料をより体系的に、具体的にイメージできる

だろう¹。

この第三のタイプの資料には、具体的には刊行される、されないにかかわらず読者の記した日記や書評などが含まれようし、本書で扱う読書傾向調査、すなわち読者への質問、回答を集計した資料もこのうちに含めてよいだろう。出版する、正確には出版できる側の資料からだけではうかがえない、あるいは見過ごされてしまう歴史を掘り起こしていくうえでも、そしてまた具体的な地域や時期のまとまった読者をとらえていくうえでも、多くの手がかりを与えてくれる資料である。

目次

はじめに	iii
------	----------

解説編—— 1

1 読書傾向調査の成り立ち	2
1.1 読書傾向調査の形式	2
1.2 初期の読書傾向調査	3
1.3 読書の調査とその統制	5
2 1920 年代	7
2.1 社会教育の整備と工場労働者の読書	7
2.2 青年の修養と読書	9
2.3 児童の課外読物と読書への関心	10
3 1930 年代前半	13
3.1 社会教育行政の整備と全国調査	13
3.2 学生生徒の思想と読書への関心	15
3.3 読書傾向調査の学術領域への広がり	16
4 1930 年代後半以降	18
4.1 読書の指導・統制へ	18
4.2 読書を通した勤労青年への関心	19
4.3 高等教育機関の読書と錬成	21
4.4 児童読物の「浄化」	22
●注	25

資料編—— 29

- 1 東京高等師範学校附属小学校「児童家庭状況取調」……………30・49
- 2 中村秋人『児童教育 涙と鞭』……………30・50
- 3 松崎天民『社会観察万年筆』……………30・51
- 4 岡山県師範学校附属小学校「児童読物調査」……………30・52
- 5 警視庁工場課「職事情調査」……………31・52
- 6 権田保之助「月島とその労働者生活」……………31・54
- 7 遠藤早泉『現今少年読物の研究と批判』……………31・55
- 8 森文三郎「長崎高等商業学校生徒調査」……………31・55
- 9 葺合教育会児童愛護会『児童読物之研究』……………32・56
- 10 長野県師範学校「生徒購読雑誌調査回答」……………32・57
- 11 東京市社会局『職業婦人に関する調査』……………32・58
- 12 東京市社会局庶務課『小学児童思想及読書傾向調査』……………32・59
- 13 東京帝国大学学友会共済部『東京帝国大学学生生計調査』……………33・60
- 14 熊谷辰治郎「青年団員が如何なる書籍を読むか」……………33・61
- 15 京都市小学校教員会研究部『児童読物の研究』……………33・62
- 16 森文三郎「大分高等商業学校生徒調査」……………33・63
- 17 中央職業紹介事務局『紡績労働婦人調査 職業別労働事情 五』……………34・64
- 18 熊谷辰治郎「地方青年の読物調査」……………34・64
- 19 多田野一「工場労働者の読書傾向」……………34・65
- 20 神戸市社会課『マツチ工業従事女工ノ生活状態調査』……………34・66
- 21 社会局監督課「職工の希望等の調査（宮崎県）」……………35・67
- 22 大日本連合青年団調査部『全国青年団基本調査 昭和五年度』……………35・68
- 23 東京府学務部社会課『求職婦人の環境調査』……………35・69
- 24 東京府立第五高等女学校「女学生の読物調べ」……………35・69
- 25 東京府立第三高等女学校「女学生の読む雑誌」……………36・70
- 26 京都帝国大学学生課『京都帝国大学学生生計調査報告』……………36・71
- 27 大阪府学務部社会課『在阪朝鮮人の生活状態』……………36・72
- 28 東京帝国大学文学部新聞研究室「小学児童及び保護者に対する新聞閲読調査」……………36・72

29	東京帝国大学文学部新聞研究室「壮丁閲読調査」	37・74
30	日本図書館協会『図書館における読書傾向調査』	37・75
31	八島炳三「児童読物の系統的考察」	37・76
32	日本図書館協会『職業婦人読書傾向調査』	38・77
33	大阪府学務部社会課『実地調査の結果から見た農村の生活』	38・78
34	小椿誠一「児童読物の系統的研究」	38・79
35	農林省経済更生部『農村部落生活調査 実態編』	38・80
36	新潟県立図書館児童室調査「新潟市内上級児童読書状況調査」	39・81
37	奥井復太郎・藤林敬三「学生生活の思想的方面の一調査」	39・82
38	松本金寿・安積すみ江「女学校生徒に於ける課外読物の 一調査」	39・83
39	日本図書館協会『労務者読書傾向調査』	39・84
40	文部省社会教育局『児童読物調査』	40・85
41	松本金寿・安積すみ江「小学校児童に於ける課外読物の 一調査」	40・86
42	川崎造船所「新聞雑誌購読調査」	40・87
43	東京市日本橋区第三青年学校『本校生徒の生活並心理に関する 調査研究』	41・88
44	山梨県教育会社会教育調査部「社会教育に於ける読書教育普及 充実に関する調査」	41・89
45	東二番丁尋常小学校「児童課外読物調査」	41・89
46	小林さえ「女子青年の読物調査」	41・90
47	横浜高商図書課「昭和十三年十月 読物調査」	42・91
48	教学局『学生生徒生活調査』	42・92
49	台北帝国大学・京城帝国大学『学生生活調査』	42・98
50	茨城県立某高等女学校「女学生の読書調査」	42・99
51	東京府中等学校補導協会「中・女学生は何を読む」	43・99
52	桐原葆見「青年の読書に関する調査」	43・100
53	飯島篤信「勤労青年の読書傾向」	43・103
54	服部智「児童文化環境の調査と読物指導」	44・104
55	神奈川県某高等女学校「女学校の読書調査」	44・105
56	文部省「児童読物調査 雑誌」	44・106

- 58 神崎清「女学生は何を読んでゐるか」……………45・108
- 59 都留長彦「女学校一年生の読物について」……………45・109
- 60 明治大学報国団政経学会『明治大学専門部学生生活調査
報告』……………45・109
- 61 労働科学研究所『青少年の勤労生活観』……………45・110
- 62 坪井敏男「青少年の余暇生活」……………46・111
- 63 日本出版文化協会児童課「勤労青少年の読書状況」……………46・111
- 64 教育研究同志会事務局『学童の生活調査』……………46・112
- 65 日本出版文化協会児童課「児童課が試みた予備調査」……………46・114
- 66 海後宗臣・吉田昇『学生生活調査』……………47・115
- 67 日本出版文化協会児童課「勤労青年は何を読むか」……………47・116
- 68 東京府内政部社会教育課『少国民生活調査報告』……………47・117
- 69 川越淳二『早稲田大学読書傾向調査報告書』……………48・118
- 70 都市学会「東京密集地区の読書調査」……………48・118
- 71 一校自治寮「愛読書調査」……………48・119
- 72 第五高等学校報国団「生徒生活調査報告」……………48・120

- 読書傾向調査掲載文献一覧……………121

あとがき……………129

1 読書傾向調査の成り立ち

1.1 読書傾向調査の形式

最初に述べたように、読書傾向調査は、読者の回答、記述をもととしたもので、読書習慣の有無、購読新聞・雑誌や愛読書について問うものが多い。ただ、統一した形はもってはおらず、これら以外にも蔵書の有無や量、読書に費やす費用や時間などをあわせて問うているものもあり、読者についての多様な情報を含んでいる。また、社会調査や学生生活調査といった調査の中に部分的に含まれている場合も多い。

こうした形の多様さに加えて、戦前の調査にはその基本情報が欠けている場合も少なくないため、資料として扱いづらい性質をもっている。つまり調査の場所、対象の人数や質問項目や、調べ方などの基本的な情報が記されておらず、はっきりしない調査もある。調査自体の規模も、数十人規模のものから数万人の調査までまちまちである。それゆえ、こうした不完全さとあわせてその調査を受け止める必要がある。

また、読書傾向調査には、その結果をまとめる際に大きく手が加わる点についても注意を向けておく必要がある。これまでに比較的よく使われてきた読書傾向調査は、ほとんどが新聞や雑誌についてのものである。その理由は簡単で、新聞、雑誌の方が単行本よりも、はるかに選択の幅がせまく、回答の集計が明解だからである。

単行本の場合、タイトル数が多く、あまりに選択の幅が広いと、回答者の答えもばらばらである。読者が回答したタイトルが正確かどうか分からない。そしてこのばらばらな結果をまとめようとすると、様々なタイトルが同数で横並びに延々と続く形になってしまう。このため、単行本の読書傾向調査は、回答結果のこれらタイトルを示さず、それらをジャンルや分野で分けて、集計した結果を示している場合も多い。しかし、どういう図書やタイトルをどう分類したかが不明な場合も多く、分類の判断や基準が一定しない。一方で、調査の中には多くの図書タイトルを丹念に記録しているものもある。こうした

特性に注意を払っておく必要がある。

読書傾向調査は一定の地域や年齢層、職種といった読者集団に対して行われ、その集団をまとまりとしてとらえるうえでの手がかりとなってくれる資料である。それぞれの読者の日記や手記といった記録は過去の読書をうかがう重要な手がかりであるのは確かだが、読書傾向調査はそれら個々の点としての読書を位置づける、いわば土台のような資料ともなろう。ただ、その結果は、そのままより広い地域や年齢層、階層全体、さらにはその時代の読者の傾向として安易に一般化できるわけではない。読書傾向調査は単にその結果をそのまま押し広げ、一般化するのではなく、それぞれの調査の時期、場所、規模や方法などを十分に意識したうえで、あくまでそうした枠の中で、一定の時期、集団の読者たちの特徴を伝えてくれるものとして扱う必要がある。本書では、それぞれの調査についてのこうした情報とあわせて各調査を参照できるようにした。

なお、形として読書傾向調査と似通った資料に、図書館の利用、閲覧や貸し出しの記録（閲覧成績）があり、読書調査として扱われる場合もある。確かに閲覧成績もむろん読書の歴史をうかがう重要な資料だが、それぞれの図書館の性質（場所や蔵書、利用形態）と深く結びつきあった資料であり、ここで扱う読書傾向調査とは異なるタイプの資料となるため、ここでは除外している。

1.2 初期の読書傾向調査

さて、それではこの読書傾向調査は、いつ頃から、どのように広がっていったのだろうか。読書傾向調査については、通史的な研究ではないものの、調査事例を広く収集し、用いた永嶺重利の研究があり、本書もこの労作に負うところが大きい²。ただ、永嶺の研究は読書傾向調査の歴史や方法自体を検討したものとはいえない。読書傾向調査は、単に客観的な調査としてなされてきたのではない。あるべき読書の理念が、しばしばこれら調査にはついてまわっており、それゆえ、その理念に向けた読書の指導や統制の手段としても機能する。読書傾向調査は、こうした歴史的な役割とあわせて解明していくことが必要となる³。

読書傾向調査は、明治末には比較的まとまった形で現れてくるが、これらは当時の学校の外での読書や教育、すなわち社会教育への関心の高まりと機を一にしている。この時期の調査として、資料編では1904（明治37）年に行われた

東京高等師範学校附属小学校の調査「児童家庭状況取調」(▶資料1)を収録した。家庭の状況を知ることが教育上必要という考えで考案され、通学や学業、しつけなどについて同小学校の605人の生徒の家庭に調査票を配布し、とりまとめられた調査で、「教科以外」の読物や読んでいる新聞、雑誌についても問うている。また、1910(明治43)年刊行の中村秋人『児童教育 涙と鞭』(▶資料2)も収めた。東京市内の小学校で行われた500人規模の読書傾向調査がひかれている。中村は日本新聞社の記者の経歴をもつが、その次に掲載したのは、同じく新聞記者の松崎天民がこの数年後に行った『社会観察万年筆』(▶資料3)の調査である。松崎は二つの高等女学校を訪れ、あわせて300人ほどの回答を得て読んでいる新聞、雑誌、書籍について調べている。

中村秋人や松崎天民に共通しているのは、児童や女学生に対する出版物、特に雑誌や小説の影響への強い危惧であり、書店でそれらに接する学童に注意を喚起している点である。文壇は自然主義文学の全盛期でもあり、生田葵山の小説「都会」を掲載した雑誌『文芸倶楽部』が発売頒布禁止の行政処分を受け、さらには起訴され裁判となって新聞で大きく報じられるのは1908(明治41)年である。松崎天民は「教科書以外に現代の女学生を教へ、現代の女学生を堕落せしむるもの」として雑誌、書籍を問題視しており、中村秋人もまた児童に対する書店や家庭での雑誌の影響を指摘している⁴。

実際に児童や女学生を取り巻く出版物も多様化していた。雑誌では『日本少年』、『幼年画報』、『少女の友』など、少女、少年向け雑誌が分化、充実していく時期でもある。それまでの講談を手に取りやすい、読みやすい形にした立川文庫の創刊は1911(明治44)年であり、こちらも似たような廉価な出版物を大量に生み出しながら児童に広がっていった⁵。これらはいずれも東京での調査だが、同時期にやはり児童について調べている岡山県師範学校附属小学校「児童読物調査」(▶資料4)もあわせて収録しておくこととした。

学校の「外」、授業後、あるいは卒業後の教育は、今日では生涯教育や社会教育と呼ばれるが、当時は通俗教育と呼ばれていた。そしてその中で重要な位置を占めるのが、これら学校の「外」に広がる出版物とその読書なのである。この学校の外側の教育、課外(または科外)教育や、義務教育を終えて働く人々に向けた通俗教育は、明治末にその整備が進んでいく。1906(明治39)年、文部省は通俗教育に関する通牒を出す。そこでは日露戦争の際に各地で開催された講談会や幻燈会が教育効果をあげたことがひかれ、地域の学校や施設を用い

て学校の外側の「公衆」に向けた教育が奨励された⁶。文部省では同年に全国の師範学校や高等女学校の校長に対して、小説を含め教科書以外の適切な読物の調査を行っていく⁷。また、翌1907（明治40）年には文部省側で教育に適した小説集の懸賞企画も行っており、学校や教科書以外の読書に対する関心がかがえる⁸。

学校の外側、なかでも就学を終えた人々への教育として、文部省が各地の青年団体の調査やその組織化に着手していくのもこの時期である。1905（明治38）年の通牒で文部省は「各種青年団体」が通俗教育に効果的であるとしてその奨励をはかっていく⁹。また、日露戦争後に各地農村の振興と自治組織の整備に力を入れていた内務省も、青年団体のこうした学校の外での教育効果を重視し、調査やその奨励に乗り出していく。

1.3 読書の調査とその統制

こうしたなか、通俗教育、社会教育の施策に強く作用していった出来事が、1910（明治43）年の大逆事件である。文部大臣の小松原英太郎はこの年9月の内訓で、教育は国家の目的に適應した国民の育成を旨とすることを強調し、「極端ナル主義」に向かわせる社会主義や自然主義の図書は学生生徒に「厳ニ閲覽ヲ禁」ずる必要があるとする¹⁰。学校やその教科の外側で「不健全なる小説」や「不健全の文書」に読みふけることで学生が害ある思想を身に着けていくことへの強い危機感を述べ、その取締りの強化を求めていく¹¹。文部省は同年に夏休み中の児童の課外読物についても通牒を通して「不健全なる思想」に結びつかないように注意を促してもいる¹²。

そして大逆事件の翌年5月、文部省に通俗教育調査委員会が設置される。委員会は書籍や図書館事業、幻燈や映画、そして講演会の三つの部に分かれ、これらの「選定」、「選択」やその普及をはかることとなる¹³。また、通俗教育調査委員会と同じく委員長を文部次官が務め、森鷗外や幸田露伴、巖谷小波ら文学者を集めた文芸委員会もあわせて設置される。当時、すでに地方でも社会教育は青年会や婦人会、あるいは図書館の事業として始まっていたが、主に各地の教育会を通してこうした活動を普及、奨励する予算措置もなされ、通俗教育の普及が進んでいった¹⁴。

読書傾向調査の歴史に話をもどせば、明治末に行われていた調査の関心が、

●注

- 1：拙著『読書の歴史を問う』（改訂増補版、文学通信、2020年8月）。
- 2：永嶺重利『雑誌と読者の近代』（日本エディタースクール出版部、1997年7月）。
また、山本武利『近代日本の新聞読者層』（法政大学出版、1981年6月）でもこうした資料が収集活用されているほか、作者や出版への統制という観点から読書調査に着目した上田信道「戦時下の読書調査（1）」（『児童文学資料研究』18号、1984年11月）がある。
- 3：拙著『〈大東亜〉の読書編成』（ひつじ書房、2022年2月）。
- 4：松崎天民『社会観察万年筆』（磯部甲陽堂、1914年7月）338頁。
- 5：滑川道夫「大衆の児童文学前史としての「立川文庫」」（加太こうじ、上笙一郎『児童文学への招待』南北社、1965年7月）。
- 6：『官報』第6792号（1906年年2月22日）。
- 7：「教科以外の読物」（『教育時論』803号、1907年8月5日）。
- 8：「文部省物語懸賞募集」（『教育時論』786号、1907年2月15日）、「懸賞物語の当選者」（『教育時論』792号、1907年4月15日）。
- 9：熊谷辰治郎編『大日本青年団史』（熊谷辰治郎、1942年8月）。
- 10：阿部浩「学長宛社会主義及自然主義等に関する文相内訓伝達書」（1910年9月、早稲田大学歴史館所蔵）。
- 11：小松原英太郎『教育論』（二松堂、1911年7月）320、323頁。
- 12：「暑中休暇と読物」（『教育研究』77号、1910年8月）。
- 13：山松鶴吉『通俗教育講演要領及資料』（宝文館、1912年2月）22頁。
- 14：倉内史郎「明治末期社会教育観の研究」（『野間教育研究所紀要』20集、1961年12月）。
- 15：『官報』第8553号（1911年12月22日）。
- 16：海後宗臣編『臨時教育会議の研究』（東大出版会、1960年3月）835頁。
- 17：国立教育研究所編『日本近代教育百年史』（7巻、教育研究振興会、1974年8月）。
通俗教育から社会教育への用語変更自体は1921年になされた。
- 18：文部省普通学務局『全国社会教育の趨勢』（『社会教育基本文献資料集成 第6巻』大空社、1991年1月）所収。文部省普通学務局『全国図書館に関する調査』（同、1922年10月）。
- 19：矢次一夫編『財団法人協定会史』（「財団法人協定会」偕和会、1980年9月）6頁。
- 20：高橋彦博『戦間期日本の社会教育センター』（柏書房、2001年2月）。
- 21：『職業婦人に関する調査』（東京市社会局、1924年12月）、『職業婦人生活状態』（広島市社会課、1927年4月）。
- 22：村上信彦『大正期の職業婦人』（ドメス出版、1983年11月）。
- 23：朝比奈策太郎『大東亜建設と青少年教育』（第一出版協会、1944年3月）。
- 24：「青年団体ノ指導発達ニ関スル件（1915年9月15日内務省文部省訓令）」（文部省社会教育局『男女青少年団概況』文部省社会教育局、1939年3月）61頁。
- 25：上野景三「解説」（『熊谷辰治郎全集』勁草書房、1984年2月）。なお、小尾晴敏と社会教育研究所の関わりについては刈田徹「大正期猶存社系国家主義運動に関する一

1 東京高等師範学校附属小学校「児童家庭状況取調」(表→ p.49)

東京高等師範学校附属小学校「児童取調統計表」(『教育研究』4号、1904年7月)、同「第三部児童状況取調統計表」(同誌、6号、1904年9月)をもとに作成。1904(明治37)年5月の調査。当時、東京高等師範学校附属小学校は、3部に分けれていた。第一部は男子のみで中学校課程につながっており、尋常小学校と高等小学校よりなる第二部、尋常小学校と補習科からなる第三部は男女共学であった。同校の初等教育研究会が各家庭に調査票を配布、記名調査で生徒605人の在籍者中、589人の回答を得ている。生徒が読んでいる新聞、雑誌についての問いを含んでいる。

2 中村秋人『児童教育 涙と鞭』(表→ p.50)

中村秋人『児童教育 涙と鞭』(実業之日本社、1910年1月)をもとに作成。「児童読物の注意」の節で、東京市内の尋常小学校四年以下男女570人、五年以上高等科男女340人を対象に、「読んだものは何でも書け」として調べたもの。調査時期等は不明。著者は日本新聞社勤務ののち、児童や幼児教育関係書を刊行、『幼児教育 情と躰』(実業之日本社、1911年3月)は本書の姉妹編にあたる。

3 松崎天民『社会観察万年筆』(表→ p.51)

松崎天民『社会観察万年筆』(磯部甲陽堂、1914年7月)をもとに作成。甲乙、二つの高等女学校での調査。甲高等女学校は1年から5年、226人回答、乙高等女学校は本科3、4年の90人が回答。調査時期は不明。読んでいる新聞、雑誌名を記入させる調査。作家、記者である松崎天民の『東京朝日新聞』の新聞記者時代の著述。

4 岡山県師範学校附属小学校「児童読物調査」(表→ p.52)

岡山県師範学校附属小学校「児童読物調査」(『児童研究』19巻9号、1916年4月)をもとに作成。同小学校が全生徒524人の「科外読物」の調査を各家庭に照会した、その回答を集計したもの。調査時期は「過日」とあるのみ。特に雑誌に指定しているわけではないが雑誌名があがっている。

5 警視庁工場課「職工事情調査」（表→ p.52）

『社会政策時報』4号（1920年12月）から、9号（1921年5月）にかけて掲載された「硝子工場職工事情」、「製糸工場に於ける女工事情」、「製綿職工事情」、「化粧品製造女工事情」「染色整理其他の加工業女工事情」、「印刷製本業女工事情調査」をもとに作成。警視庁工場課が1919年5月31日管下の70の工場で調査し、113,098の調査票を集計、その後、職種別に結果がまとめられていったもので、「読物」の回答が新聞、雑誌に分けて集計されている。ここでは製糸工場（21工場、2,515人、男工165人、女工2,350人）、印刷製本業（女工1,054人）の分を収録した。

6 権田保之助「月島とその労働者生活」（表→ p.54）

内務省衛生局『東京市京橋区月島に於ける実地調査報告 第一輯』（同発行、1921年12月）をもとに作成。内務省保健衛生調査会の委員、高野岩三郎によって提案され、1919年から翌年にかけて調査が行われている。「労働者階級」における新聞の役割にも関心を向けている。1919年8月に月島第一第二尋常小学校在学4年から6年の男女1,173人とそのうちの「労働者家族の児女」659人、また、対照のため神田区東松下町の千桜尋常小学校4年から6年の児童435人に対してなされた調査。

7 遠藤早泉『現今少年読物の研究と批判』（表→ p.55）

遠藤早泉『現今少年読物の研究と批判』（開発社、1922年5月）をもとに作成。1921年の「夏のころ」、東京市767人（男子403人、女子364人）、千葉県村落254人（男子132人、女子122人）の小学生（農村のみ高等科40人を含む）を調査。家庭の購読新聞、自身の購読する「少年雑誌」、愛読する「少年読物」の名称を問い、そのタイトルを集計したものでここでは雑誌のデータを収録した。

8 森文三郎「長崎高等商業学校生徒調査」（表→ p.55）

長崎高等商業学校『商業と経済』第2冊（1922年3月）をもとに作成。1921年6月下旬に調査。563人の生徒の内、451人が回答。生計、生活調査で、新聞、雑誌の購読者数と借覽して読んでいる者の数を調べ、書籍は分野、主要著者名でとりまとめている。森文三郎は、長崎高等商業学校の教授で、同校の『研究館月報』にも調査内容を出している。後に大分高等商業学校に移り、同

あとがき

本書でまとめた戦前、戦中の読書傾向調査は、部分的には多様な領域でなされ、またその後、引用、言及されてきたものだが、これらをまとめた資料集がなかった。読書への関心は社会学や教育学、文学はもとより心理学、図書館情報学や歴史学など、多様な領域に及ぶが、そうした多様な領域や方法の入会地のような場ゆえにこうした資料がとりまとめづらかったということもあろうし、また、本書で述べたようになされた調査自体に問題があったり、それらが多様な方法や形をもっていたということも大きな理由となろう。

とはいえ、それにもかかわらずこうした読書傾向調査は実際に上記の研究領域でこれまでに引用、利用されてきたのも確かである。だからこそそうした基礎となる資料の意味や役割に目を向けておく必要があるし、そのためにはまずはそれらを集成して、いろいろな領域、視点から検討できるようにしておく必要がある。本書がこれら資料に十分な目配りができているとは言い難からうし、資料のとりまとめに至らない点も多くあろうかと思う。ただ、それでもまずはこれからの研究の土台作りをしたいと思い、本書を作ることとなった。また、そのための助成、支援も得られた（科学研究費助成基盤研究C「戦前・戦中における読書傾向調査の基礎研究」、及び早稲田大学特定課題研究同課題）。

もともと近代の読書や出版、流通に関心をもって研究をしてきたので、読書調査については以前から関心をもってはいた。それが、『戦時期早稲田大学学生読書調査報告書』の資料復刻（不二出版、2021年）や、戦時期の読書傾向調査の役割を論じた拙著『「大東亜」の読書編成』（ひつじ書房、2022年）をまとめたことがきっかけとなって、読書傾向調査の収集と整理に注力するようになっていった。それらをもとに昨年の春から夏にかけ、著書として原稿をまとめる仕事を進めていた。その原稿を終えて刊行の準備を進めていく一方で、その折に収集し、整理した戦前、戦中の180件余りの読書傾向調査を俯瞰、一覧できるような資料集があればという思いも強くなっていった。ただ、高価な研究書ではなく、学生から研究者、実務にたずさわる人々を含め、安価で参照、活用しやすいデータ集にしたいという思いも強かった。

以前、図書館学のテキストの企画でお声がけいただいていた樹村房の大塚栄一氏に、この企画の相談にのっていただいた。高価な研究書ではなく、広く使

える資料集を、辛抱強く刊行し続けてゆける出版社が必要だったからだ。こちらの意を汲んで、こうあってほしいという形にいただいた樹村房には心から感謝したい。また校正にあたっては小関有希氏に協力をいただいた。

読書の理論や歴史の研究をはじめて、もう 30 年以上になる。その間の自身の研究が、どれだけ研究に貢献したのかは心もとない限りだが、それでも心強いのは、読書の歴史に取り組む、若い世代の研究者と、そのすぐれた成果が着実に増えてきたことだ。そしてまた読書に関わりをもつ研究分野、領域も多様な形で広がりつつある。そうしたこれからの研究者はもちろん、読書に関心を抱く多くの人たちに、本書が少しでも役立っていけばと思う。

2025 年 3 月

和田 敦彦

[著者紹介]

和田 敦彦（わだ・あつひこ）

早稲田大学教育・総合科学学術院教授。専門は日本近代文学研究、及び出版・読書史研究。著書に『読むということ』（ひつじ書房、1997）、『メディアの中の読者』（同、2002）、『書物の日米関係』（新曜社、2007）、『越境する書物』（同、2011）、『読書の歴史を問う』（改訂増補、文学通信、2020）、『「大東亜」の読書編成』（ひつじ書房、2022）等がある。

読書調査の歴史と資料

——戦前・戦中

2025年5月2日 初版第1刷発行

著 者 和 田 敦 彦

発行者 大 塚 栄 一

発行所 株式会社 樹村房

〒112-0002

東京都文京区小石川5丁目11-7

電話 03-3868-7321

FAX 03-6801-5202

振替 00190-3-93169

<https://www.jusonbo.co.jp/>

組版・印刷／亜細亜印刷株式会社

製本／有限会社愛千製本所

©Atsuhiko Wada 2025 Printed in Japan

ISBN978-4-88367-408-4 乱丁・落丁本は小社にてお取り替えいたします。